

平成 23 年度福井大学研究育成経費「若手研究者による今後の進展が期待できる研究」 「いえ型保育空間」における 異年齢保育の集団形成に関する調査研究

研究代表者： 栗原 知子（教育地域科学部・助教）

共同研究者： 櫻井 康宏（工学研究科・教授）、松村 正希（株式会社莫設計同人・代表取締役）、小山 逸子（K 保育園・園長）

概 要	子どもが 1 日の大半を過ごす保育施設は単なる通所施設ではなく、子どもの発達を保障する家庭的要素を軸とした生活施設であるべきである。現代の一般的住宅と同じように「居間」「寝室」「食堂」などの各居室によって構成された「いえ型保育空間」において、1～5 歳児混合の「きょうだい保育」を実施する全国初の保育園を対象に、より豊かな子どもの生活環境を提案するべく、保育室内での調理員常駐・調理実験を試験的に実施し、前後の子どもの生活実態の把握を行った。その結果、保育室内の居室利用は、概ね「寝室」＞「居間」≧「食堂」＞「ユーティリティ」の順に多く、園児が体験する集団の 7 割以上が「異年齢集団」であり、特に、食事・着替え・午睡などの生活にかかわる行為での異年齢の関わりが顕著であった。また、実験による子どもの居場所及び集団構成に大きな変化は見られなかったが、個人追跡調査の結果では、子どもが調理員のもとへ自分のタイミングで向かう姿が多く見られ、保育士との関わり方とは違う新たな関係づくりが見られた。
関連キーワード	保育園、子ども、集団、異年齢保育、調理員常駐実験

研究の背景および目的

「いえ型保育空間」とは、従来の食寝同室の保育空間とは違い、普通の住宅と同じように「居間」「食堂」「寝室」などの各居室によって構成された「家」のような保育空間の事を言う。日本の保育園の多くは、同年齢同士の「年齢別保育」をワンルーム型保育空間の中で一斉に行うことが主流であった。近年、子どもの意思を尊重した「自由保育」や子ども同士の育ち合いを目的とした「異年齢保育」が注目を集めている。しかしながら、「異年齢保育」を実施する園の多くは、年齢や発達段階の違いを考慮し、1 日の保育生活の中でも食事や午睡といった生活行為を中心とした、ごく限られた条件付きのものとなっている。3～5 歳児や 4～5 歳児のみの交流だけでなく、本来の一般家庭のように 1、2 歳児も含めた「きょうだい保育」は、新たな異年齢保育のあり方として期待されている。

本研究は、学内外の共同研究者と共に、「1～5 歳

児混合の異年齢保育」というソフトの仕掛けと「いえ型保育空間」というハードの仕掛けを導入して「きょうだい保育」を実践する全国初の保育園において、以下の 3 点を明らかにすることを目的としている。

- ①「いえ型保育空間」における子どもの居場所と、「異年齢保育」における集団形成の実態を把握する
- ②「いえ型保育空間」において一般家庭のように「保育室内における食事づくり」を試み、この実践を通して、子どもや調理員の生活がどのように変化するかを明らかにする
- ③保育施設を「家」と捉え、子ども個人の意思を尊重する保育を行う北欧の保育スタイルと間取りの歴史的変遷を調査し、次年度の海外調査にむけて資料・文献調査を行う

研究の内容および成果

調査対象は滋賀県の K 保育園（2004 年開設認可保育園）である。K 保育園は、「きょうだい保育」を実施する 3 クラスの保育室と 0 歳児保育室の 4 保育室から成り、各保育室は、「居間」「対面式キッチン付の食堂」「寝室（畳敷き）」「ユーティリティ（玄関、着替えスペース、トイレ）」の 4 つの機能分節型の保育空間となっている。調査対象児は Tp クラス、Ks クラスの各約 25 名（1～5 歳児各 5 名程度で構成されている）である。「きょうだい保育」の実践において、より家庭的な保育環境を実現するために、保育室内調理を可能と

する空間設定となっていたものの、経済的理由や職員配置の問題から、対面式キッチンの利用や食堂の利用が少なかった。よって、本研究では昨年までに実施した以下の 3 種の調査及び実験（表 1）を用い、精緻に比較分析することで、集団構成及び利用者の行動軌跡把握を行う。

- I. 居場所調査：2 クラスの全園児の居場所を 5 分毎（9 時～16 時）に図面上にプロット→各年齢別の居室利用実態と集団形態（一人、異年齢、同年齢、規模など）の把握
- II. 個人行動観察調査：各クラス 1～5 歳児 1 名ずつ

つ及び調理員を対象に保育室内での移動軌跡を記入→より精緻な集団形態の把握と各室への移動経路の把握

Ⅲ. 保育室内調理員常駐実験：Tp クラスを対象に6ヵ月間の調理員常駐（9時～16時）・保育室内調理の実施→実験前（11時から1時間昼食の温め、配膳のみを保育室内で行う）・開始直後（2週間）・3か月後、5か月後、半年後の5過程の中での調理員と子どもの集団形成、各室への移動経路の変化を把握

保育室内での子どもの居場所と集団構成

各室の利用状況は、各クラスの保育内容や方針によって多少の違いは見られるものの、概ね「寝室」40%弱>「その他（保育室外）」20%≧「居間」20%弱≧「食堂」20%弱>「ユーティリティ」8%であり、低年齢ほど「寝室」「ユーティリティ」、高年齢ほど「居間」「食堂」での滞在が多い。一日を通して、各子どもが「異年齢集団」に属する割合は7割を超えており、特に「寝室」「食堂」で形成されていることがわかった。食事や着替えなどの生活時間と自由遊び時間では、生活時間での「異年齢集団」形成が多いのに対し、「同年齢集団」は自由遊び時に比較的多く形成されており、特に5歳児は「同年齢」で遊ぶ機会が多い。「異年齢集団」の年齢構成は、生活時間時に多様な年齢で構成され、遊び時間では1歳違いの2階層年齢での集団構成が多くみられる。

調理員常駐調理実験による変化

調理員常駐実験による子どもの集団形成や居場所、実験半年後>実験開始直後>実験1年前の順に「寝室」「食堂」利用が高く、異年齢集団形成割合も多かったが、実験対象外のKsクラスとの比較から、1月と6月の保育方法の違いによる5歳児の午睡の有無に起因すると考えられる。しかし、活動の合間に台所へ立ち寄る子どもの増加や調理員を含めた集団は、「3か月後」を境に増加しており、個人追跡調査から調理員との関わり方に個人差が認められた。また、調理員自身の行動（図1）も食堂・台所を拠点に徐々に「居間」「寝室」へと広がり、「居間」「寝室」間の移動の増加や遊び時間での集団参加も見られるようになった。子どもの行動例（図2）をみると、活動日によって行動パターンは異なるものの、常に台所で作業を行う調理員のもとへ、子ども個人が自分のタイミングで向かう場面が多くみられるようになった。

表1. 本研究にかかわる調査の概要

NO	調査	期間	対象	時間	方法
I	基本調査	2008年1月～2月のべ10日間	Tpクラス:26名 Ksクラス:25名	9時～16時 5分間隔84時点	各保育室の図面上に5分間隔で子どもの居場所・年齢・グループ構成・活動内容を目標によってプロット
II	調理員常駐調理実験調査	2009年12月～2010年6月 ①12月:実験前 ②1月:実験開始直後 ③3月:実験3か月後 ④5月:実験5か月後 ⑤6月:実験半年後 ※実験はTpクラスのみで、Ksクラスは比較分析のための調査を実施	◆行動観察調査 Tpクラス:25名 Ksクラス:25名 調理員2名 ◆個人追跡調査 Tpクラス・Ksクラス 各クラスの1～5歳児各1名、調理員各1名	①～⑤各2日ずつ 9時～16時 5分間隔84時点	各保育室の図面上に5分間隔で子どもの居場所・年齢・グループ構成・活動内容を目標によってプロット
III	海外調査のためのプレ調査	2010年9月～10月	フィンランドの保育園4園	①～⑤各1日ずつ 9時～16時 5分間隔84時点	9～16時の対象園児の行動軌跡を目標によって図面上に記入し、5分間隔84時点の居場所・食生活・グループ構成・活動内容を記録
IV	海外調査のためのプレ調査	2011年7月	IPA国際会議		1980年代に建設された保育園を中心に、保育方針・運営体制・異年齢保育の様子・利用居間の働き取り及び保育園の図面採取
V	海外調査のための情報収集				調査分析の発表及び他国の保育園児の生活について情報収集

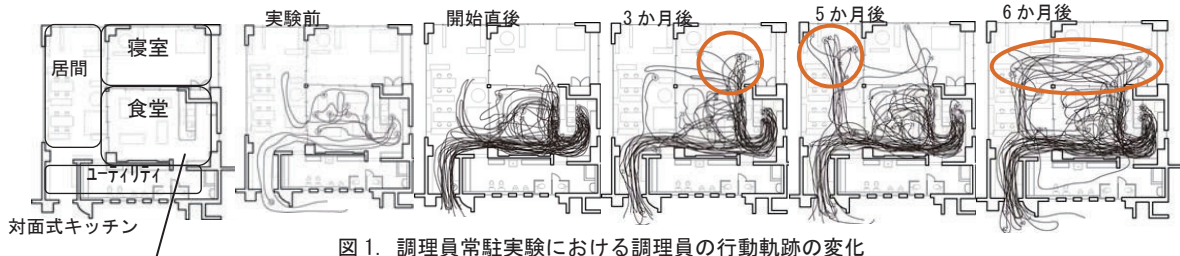


図1. 調理員常駐実験における調理員の行動軌跡の変化

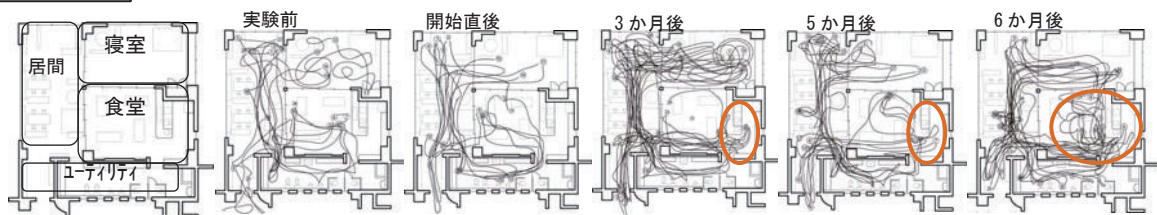


図2. 調理員常駐実験における3歳児の行動軌跡の変化

本助成による主な発表論文等、特記事項および競争的資金・研究助成への申請・獲得状況

「主な発表論文等」

発表論文：「障害時と健常児が一緒に生活できるフィンランドの保育環境」，こども環境学研究，Vol.7, No.1, p48, 2011年8月

国際会議発表：「The Effects of Children in Nurseries Introducing Multi-aged Grouping Child Care」，18th International Play

Association World Conference 2011, 2011年7月（ウェールズ）

「競争的資金・研究助成への申請・獲得状況」

内藤記念科学奨励金・若手ステップアップ研究助成・2013年4月から3年間・北欧「いえ型保育空間」における異年齢保育の実態と園児の集団形成に関する調査研究・代表・申請予定